

氏名	しゃ しんはん 謝 心範
学位の種類	博士（国際コミュニケーション）
報告番号	甲第2号
学位授与年月日	平成27年3月21日
学位授与の要件	学位規則第4条、武蔵野学院大学大学院学則第20条第2項及び学位記授与に関する規程第3条第3項の規定による
学位論文名	『養生訓』の分析研究—漢籍の影響
論文審査委員	主査 武蔵野学院大学 教授 劉 金釗 副査 武蔵野学院大学 教授 佐々木 隆 副査 元武蔵野学院大学 教授 大久保 治男

論文の内容の要旨

本論文は『養生訓』が漢籍の強い影響を受けながらも、単に漢籍のものから養生に関する文章をまとめたものではなく、一般庶民にもその内容が分かるように再構成し、漢文ではなく、和文体で表したことを次の七章から視点で考察する。『養生訓』を476項目に分割し、そこに引用されている漢籍の出典を明らかにすることにより、漢籍の影響を実証する共に、貝原益軒が主張する「養生に必要な概念と作法」について検討を行うものである。

「第一章 養生の定義」では日本における養生定義と中国における養生の定義を確認している。「生命力」を養うのが「養生」のより本質的な定義としている。一般書から専門書に至る「養生」や「養生」に関連する「病気」「未病」の概念についても取り上げた。

「第二章 中国、日本の養生文化の流れ概要」では養生文化は起源を中国とし、『道德経』、『莊子・養生主』、『黄帝内経』、『神農本草経』、『傷寒論』等をまず取り上げている。日本では『撰養要訣』、『養生抄』、『養生秘鈔』を経て、日本の代表的な二つの養生書、丹波康頼『医心方』（984）、栄西『喫茶養生記』（1211）を取り上げた。この二つの養生書は宮廷や将軍、僧侶といった特定の階級の人だけが読んでいた。調査の結果、江戸時代までの日本の養生に関する書籍の著者122名の記録を基に資料が特定できた74名の文献について概要をまとめた。特に中国における養生文化の流れの概要を「表1 中国に起源する養生に関する文献史（概要）」として江戸時代までの養生に関する文献を紹介した。

「第三章 「思」の視点から見た『養生訓』についての考察」では476項目のうち、「思」の要素に言及しているのは229項目あり、全体の48.1%を占めている。「思」とは何よりも「心」を深くかかわり、外部とその相互作用のもとで行われ、内面的な修行によっても変化するものである。

「第四章 「行」の視点から見た『養生訓』についての考察」では476項目のうち、「行」の要素に言及しているのは211項目あり、全体の44.3%を占めている。先に取り上げた「思」つまり「心」が人間の現実世界での実際の行動、すなわち「行」となって現実化されるため、「思」と共に「行」は重要である。「行」とは日常の生活そのものであることを強調している。生活態度において重要なのは、自然の原理に対する尊敬の念、「畏」という感情を持つことである。これによって生まれる「慎み」の心が具体的に展開されたのが、「行」の価値を判断する基準「ほどほど」という視点である。

「第五章 「食」の視点から見た『養生訓』についての考察」では476項目のうち、「食」の要素に言及しているのは221項目あり、全体の46.4%を占めている。中国の養生文化の食に対する概念「医食同源・薬食同源」に基づいていた。貝原益軒の「食」の概念を広く捉えなおすと、体内にと入れる全ての物質と摂取方法までがその対象であったと考えることができる。また、同時に「食」は具体的な主体の行動、「行」とも考えられる。

「第六章 「住」の視点から見た『養生訓』についての考察」では476項目のうち、「住」の要素に言及しているのは46項目あり、全体の9.7%を占めている。人間にとって「住」の持つ意味には二つの側面がある。一つは自然環境、もうひとつは人工環境である。人間は置かれている環境について認識し、正しい対応・行動を取らなければならない。この自然環境には時間的な概念も含まれている。つまり季節と人間身体の変化との関わりである。

「第七章 「衣」の視点から見た『養生訓』についての考察」では476項目のうち、「衣」の要素に言及しているのは5項目あり、全体の1.1%を占めている。「衣」とは単なる衣服のことではなく、何らかの目的で人間の身体に装着するもの全般を指している。「衣」には生理性・心理性・社会性の三つに分けて考えることができるが、人間の最も近い小環境と考えることができる。それは外界の脅威から自分（内面）を保護してくれる緩衝地帯であり、そこから人間の存在と精神は強い影響を受けている。

「結論」はこれまでの先行研究及び『養生訓』の分析を行いその結果を五つにまとめた。第一に『養生訓』見られる中国古典文献からの影響が92.2%であったこと。第二に蘭学及び西洋医学が1713年から1864年までの間に初版を含めると13回出版されるほど、社会の上層部だけではなく、一般庶民にわかりやすく『養生訓』を通して養生文化知識をひろめたこと。第三に中国発祥の養生文化の基本構成の「衣食住行思」を重要視する順番として「思行食住衣」で分析したこと。第四に日本のこれまでの『医心方』、『喫茶養生記』とは異なり、一般大衆に向けてのために日本語で著したこと。第五に「未病」の概念と対策の確立は養生文化中の重要な存在であり、今日の社会にもかなりの部分に当てはまり、

『養生訓』を再認識することとは積極的な意味があること。2014年は貝原益軒没後300年、2013年は『養生訓』発表300年という記念すべき年に『養生訓』の再評価をすることは時代のニーズにも呼応している。そして、養生の学術は人々と近い存在であり、普段の生活において「思行食住衣」の分野に養生の学術を注ぎ込めば、より健康的、快適な生活を営むことができるとして論を閉じている。

巻末の表については本論を支えるための根拠として表2、表3が用意された。「表2 養生訓の分類、原文、現代語訳、漢籍文詳細。計476」は本論文を実証するための分析である。可能な限り引用文原文に当たることによって、その漢籍からの影響を明らかにした。特に四つの文献については『養生訓』で示されているものと一致しないことが明らかになった。「表3 養生訓引用順で統計、表示」では調査にあたり「資料源」として図書館あるいは研究機関期間名を明記した。これによりどの文献がどこで閲覧したものかを明確にした。

論文審査の結果の要旨

本論文は、『養生訓』が漢籍（中国古典文献）の強い影響を受けていることを、『養生訓』を476項目に分割し、そこに示された文献の確認あるいはそこに示された概念の出所の文献を明らかにすると共に、蘭学・西洋医学が導入される以前に『養生訓』が日本語で書かれたことにより広く一般に普及した。養生に関する日中の諸文献を広く照合しながら分析した研究である。

「第一章 養生の定義」では日本における養生定義と中国における養生の定義を確認しているが、一般書から専門書に至る「養生」や「養生」に関連する「病氣」「未病」の概念についても取り上げたために、冗漫さを禁じ得ないが、「未病」の概念を取り上げる必要性があったことは明白である。定義は先行研究をよく抑えている。構成が「第1節 日本における養生の定義」「第2節 中国における養生の定義」「第3節 未病の定義」「第4節 養生の一般的概念」となっており、構成上、未病の定義というよりは隣接する概念をさらに整理する必要がある。

「第二章 中国、日本の養生文化の流れ概要」では養生文化は起源を中国とし、江戸時代までの日本の養生に関する書籍の著者122名の記録を基に資料が特定できた74名の文献について概要をまとめた。概要は時系列で整理されているが、養生に関する内容の核が何であるかが示されていないなど、纏め方に不十分さがあるが、「表1 中国に起源する養生に関する文献史（概要）」のように整理されたことは資料として大きな価値がある。

第三章以下は具体的な『養生訓』の分析となり、本論文の核心的な部分である。分析に

あたり「思行食住衣」の分類及びそれぞれの構成要素を示した。分析方法は①『養生訓』原文に引用文献が著者、文献名、参照内容が明記されている、②筆者が原文の内容により引用参照文献を推定、③引用文献が『頤生輯要』を手掛かりとなるもの、④特定不能とした。明確な基準を設けることによって影響度合いの尺度もデジタル化することによって明らかにしたことは本論文の大きな特徴である。また、④特定不能の内容があることも、研究者として真摯な態度で分析を行っている点も評価できる。「表2 養生訓の分類、原文、現代語訳、漢籍文詳細。計 476」はそのまさにその分析を網羅したもので、本論文の最も大きな特徴である。比類なき分析表である。

「思」の視点から見た『養生訓』についての考察では 476 項目のうち、229 項目あり、全体の 48.1%、「行」については 211 項目あり、全体の 44.3%、「食」については 221 項目あり、全体の 46.4%、「住」については 46 項目あり、全体の 9.7%、「衣」については 5 項目あり、全体の 1.1%を占めていることを明らかにした。それぞれ重複しているものもあるため、100%での換算はできないが、客観的にデジタル化したことで「思・行・食」が重要であることは明らかとなった。

「思行食住衣」の分析においても単に漢籍文の引用元を明示するだけでなく、日中両国の研究にも目を向けながら進めている点は高く評価できる。「思行食住衣」での分類は項目によりそれぞれの構成要素が重複している場合もあり、この点をどのように整理するかといった点では課題が残る。特に「行」と「食」は考え方によっては「食」は「行」の一部として捉えることが可能であり、本論文では項目によっては重複したものとして取られているため、デジタル化したものの、今後の課題が残されることとなった。

先行研究では漢籍『頤生輯要』の和文訳が『養生訓』であるとの指摘をするものもあるが、結果的に詳細な分析は今回の本論文がそれもなしえたこととなる。

「結論」では『養生訓』の分析を行った結果を五つにまとめた。第一に『養生訓』見られる中国古典文献からの影響が 92.2%であったこと。第二に 1713 年から 1864 年までの間に初版を含めると 13 回出版されるほど、一般庶民にわかりやすく『養生訓』を通して養生文化知識を広めたこと。第三に中国発祥の養生文化の基本構成の「衣食住行思」を重要視する順番として「思行食住衣」で分析したこと。第四に日本のこれまでの『医心方』、『喫茶養生記』とは異なり、一般大衆に向けてのために日本語で著したこと。第五に「未病」の概念と対策の確立は養生文化中の重要な存在であり、今日の社会にもかなりの部分に当てはまること。第一及び第二については客観的なデータをもとにした結論である。第三については「思行食住衣」の順として新たに提唱したことについての十分な説明がなされていない。第四については重要な点であるが、本論であまり強調されていない。第五については派生的な内容であるため、結論として大きく取り上げるものというよりは課題とする方がふさわしい。

本論文は『養生訓』を漢籍の影響を明らかにするためのその本文を詳細に分析したものとしては類を見ないものとして高く評価できるものである。しかし、分析後の論旨の発展では本筋から離れている点も多く、十分に論じ切れていない点も見受けられるが、全体として『養生訓』を漢籍文献から実証的に研究したものとして、その成果は高く評価される。

文献調査に当たっては、その調査図書館及び研究機関等を明記すると共に、引用文原文に当たることによって、その漢籍文献を明らかにしたこと、また、今回の調査で明らかにできなかったことも明示するなど、研究者として真摯な態度で臨んだ。

以上の結果、本審査委員会は、博士後期課程三年、謝心範に博士（国際コミュニケーション）の学位を与える資格が充分あると認める。